

<p>【学校教育ビジョン】 自ら学び、判断し、行動する金明っ子の育成</p> <p>【めざす児童像】 よく考え、自分から動く子 ・自ら学びに向かう子 (「学びたい! わかりたい! できるようになりたい!」という児童の学びへの意欲を支える 自律した学びを育てる 個別最適な学習と協働的な学びの一体的な充実を目指す) ・自分で考え行動する子 (主体的に考え行動する場づくり 居心地のよい学校・学級づくり 生徒指導の4つの視点を生かした教育活動を推進する) ・たくましい子 (挑戦する意欲、最後まで粘り強くやり抜く力を育む 自分の命を自分で守る意識と実践力を高める 健康や安全に対する意欲・知識・実践力を高める)</p>

評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果 (中間)	判定結果 (最終)	今後の改善策
①教育課程・学習指導	児童に学びを委ねる授業づくり	・自律した学びを指して個別最適な学びと協働的な学びの充実を図る。	研究主任	6年間を見通した「自律した学びの姿」の共有により、児童は集中して学ぶ姿勢や自己選択の力を伸ばし、多様な仲間と学び合う姿が見られた。一方で、学びの広まりや深まりにつながる相手の選択や、SOSを出しにくい児童に対する支援が必要である。	【成果指標】 ・学び方のめあてをたて、次につなげる振り返りができる。	自分で学び方のめあてをたて、振り返ることができた児童が A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 70%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査	A	A	肯定的な回答(A・B)の割合は引き続き高く、児童が学びに前向きに取り組んでいる様子は概ね維持されている。一方で、中間報告時から大きな変化は見られず、C・Dの割合がわずかに増加する結果となったことから、学びの実感が十分に得られていない児童の存在も考えられる。各学級では、めあての提示や振り返りを意識した授業改善を進めてきたが、それらが必ずしも児童の「自分が学びの主人公である」という実感に結びついていない状況も見られる。学年や児童の実態による差があると考えられる。また、算数科を中心とした取組に重点を置いてきたことから、今後はその成果を他教科にも広げ、教科横断的な学びとして位置付けていくことが課題である。引き続き、各教科において育てたい学びの方の明確にし、児童と目標を共有することで、学びの自覚を高めていきたい。
	基礎・基本の定着	・計算チャレンジで、計算力の定着を図る。	教務主任	児童は課題に真摯に取り組み、基礎・基本の定着が着実に図られている。今後は繰り返しの練習を通して、さらに自信をもって活用できる力を育てていく必要がある。	【成果指標】 ・児童が計算の基礎・基本を身に付けている。	計算チャレンジ(1年2年は、計算3分プリント)の正答率80%を超える児童が A95%以上 B85%以上 C75%以上 D75%未満	計算チャレンジ・計算3分プリント(7月 12月)	B	B	12月の計算チャレンジでは、正答率80%を超える児童の割合が87.6%であった。基礎的な計算力は定着しているが、定着の遅い児童が一定数いる。今後も苦手な問題を中心に計画的な計算チャレンジの実施を継続し、個別に支援が必要な児童への適切な支援の充実を図っていく。
②生徒指導	居心地のよい学校・学級づくり	・児童の、児童による、児童のための学校づくりを推進する。	児童会	児童は授業に限らず、行事や特別活動にも主体的かつ意欲的に取り組んでいる。今後は、昨年度の実践を土台に、より創造的で自治的な学校づくりを児童自らが力強く進められるよう、教師は一步引いて見守りつつ、的確に支援していく。	【満足度指標】 ・児童が「学校は楽しい」と感じている。	「学校は楽しい」と思う児童が A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査	A	A	「学校が楽しい」と感じる児童の割合は97%となり、中間報告時と比べて向上した。特に、C層からB層への移行が見られ、肯定的に学校生活を捉える児童が増加したことは成果である。この背景には、児童会の種目を児童会目標に即して精選し、全校でその目標を意識しながら実践を重ねてきたことがある。また、活動の途中や終了後に振り返る時間を意図的に確保し、児童自身が達成感や学びを確かめる場をもてたことが、意識の向上につながった。今後は、B層の児童がA層へと高まることを目標に、なぜ「やや楽しい」と感じているのかを丁寧に見取り、児童理解に基づいた対応や活動の工夫を行っていく必要がある。
	いじめ・不登校問題への組織的な対応	・いじめ、不登校の問題に対して、組織的に対応し、未然防止・早期発見・早期対応及びその記録に努める。	生徒指導主事	児童は概ね落ち着いて学校生活を送っているが、中には人間関係や学業に対して不安な思いをもっている児童が一定数いる。児童の思いを知り、受け止め、真摯に向き合っていくには、組織的な対応が必要となってくる。情報の共有や記録の体制を整え、全教職員で対応にあたる。	【満足度指標】 諸問題の未然防止・早期発見・早期対応及びその記録の取り組みが、組織的・協働的かつ日常的に行われている。	アンケートや面談の実施が、諸問題の対応に役立っていると回答した教職員が、10人中 A 10人 B 8~9人 C 6~7人 D 5人以下	1・2学期末に、教職員を対象にアンケート調査	A	A	生活アンケートや児童理解の会を通して、教職員間で情報を共有し、組織的に対応することができた。また、日常から職員室で児童についての情報交換がなされ、担任が一人で問題を抱えないような雰囲気も醸成されている。今後は、対応した事案の記録が適切に残るよう、生徒指導主事が積極的にシートを活用を促していく。
③キャリア教育・進路指導	自己肯定感・自己有用感の向上	児童に感謝の気持ちを伝えるため、日々の活動や特別活動を通じて、個々の努力や成果を認め、励ます声かけを行う。	キャリア教育	日々の学校生活や行事において、自分の目標を意識しながら取り組み、達成度を振り返る姿が見られるようになってきた。今後は、特別活動や委員会、清掃などを通して「人の役に立つ喜び」を実感できる機会を大切に、自己有用感を高め、自信や次の目標につなげていけるよう支援していく。	【成果指標】 児童が誰かの役に立つ喜びを実感している。	「誰かの役に立つうれいですか」と思う児童が A 85%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査	A	A	12月の人権週間には、片山津中学校の取り組みに倣って「goodbehaviorカード」に取り組んだ。良い行動や言動が見られた時に、その姿をその場で価値づけすることによって、子どもたちはとても喜んでいく様子が見られた。また、2学期は学校行事も多く、人の役に立つ喜びを感じられる場を意図的に設定することもできた。子どもたちの頑張りを見逃さず、教師が価値づけをすることを今後も継続していきたい。
④保健管理	健康に対する意識・実践力の向上	計画的な指導により、健康的な生活習慣を身に付け、健康に過ごす意識・実践力の向上を図る。	保健主事 養護教諭	メディアのルールについて、学級での指導により正しい知識・技能を身につけるとともに、自ら実践しようとする意識や態度を育てる必要がある。	【成果指標】 児童が自ら生活習慣を改善しようとしている。	メディアのルールの改善について、自分なりに考えて取り組むことができた児童が A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査	A	A	児童アンケートの結果では、90%の児童が肯定的に回答している。メディアの使用時間を可視化できるようげんきアップカードを工夫した結果、「寝る1時間前には使用をやめる」という目標の設定が増加している。ただ、使用時間が平日に3時間以上の割合が大きくなり(35%)、長時間使用は依然として課題である。来年度も、取り組みを継続しながら、適切な使用時間について児童自身が考え、決定できるように指導を改善していきたい。
	体力・運動能力の向上	金明マラソンや1校1プランの取組により体力・運動能力の向上を図る。	体育	昨年度の体力テストでは、20mシャトルランの記録が県平均を上回る学年が多かったものの、記録や意欲の個人差は大きい。本校の伝統である金明マラソンを充実させることで、児童のさらなる体力向上を図りたい。	【成果指標】 児童がシャトルランの記録が向上するように努めている。	20mシャトルランの記録が6月に比べて上がった児童が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	6月、11月に4年生以上の児童を対象に計測		D	6月と11月の測定結果を比較したところ、記録が向上した児童の割合は43%であった。今年度は、金明マラソンにおいてタイムトライアルを2度実施して、児童の意欲向上を図った。一方で、気候によりマラソンに取り組む回数そのものが減少しており、継続的に体力の向上を図ることができていなかった。来年度は年間を通して取り組みを継続できるものを模索したい。
⑤安全指導	計画的な安全教育と避難訓練の実施	どのような行動をとることが安全なのか、自ら考え行動できる力を高めるために、訓練の前に避難の際に必要な知識を伝え、訓練後に振り返る時間を設定する。	教頭	年間を通して、計画的に避難訓練を行っている。児童が自ら考え行動しようとする意識の向上を図るため、事前学習を取り入れてきた。自分の命は自分で守るという意識やそのために何が大切かという知識を身につけるため、事前の安全学習は継続して行う必要がある。	【成果指標】 児童が、生活、交通、災害に関する様々な危険の要因や事故の防止について理解し、進んで安全な行動ができるよう努めている。	自分の命は自分で守ることができた児童が A 90%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査	A	A	年間計画に基づいた訓練の実施ができた。いのちを守るための知識や心得を訓練前に先行し、それぞれの訓練の意義を理解して臨めるようにした。これにより真剣に訓練を行い、その大切さを実感できた。来年度も年間計画を立て、見直しをもって行う。各訓練における、状況設定や担当者を変えて教職員の防災意識を高めていく。
⑥特別支援教育	個に応じた支援の充実	配慮が必要な児童についての情報・効果的な支援の在り方を共有し、個に応じた支援を行う。	特別支援教育コーディネーター	定期的校内支援委員会を開き、支援の方法を検討する。SC、巡回相談員、専門相談員などから助言していただいた支援内容や方法を支援委員会でも共有し、実践したことに対して児童の姿が見られたと感じている。	【成果指標】 支援内容や方法を実践しようとする児童の姿が見られたと感じた教職員が10人中 A 8人以上 B 7人 C 5~6人 D 4人以下	1・2学期末に教職員を対象にアンケート調査	A	A	準備してきた支援をより有効なものとするためには、授業における児童の学びの様子を的確に見取り、思考や取組の段階に応じた声かけを行うことが重要である。特に、つまずきの考えや考えが深まりつつある場面を捉え、「どこで迷っているのか」「何に気付いているのか」を見出し、また、次年度に学年や担任が変わっても支援を継続できるよう、指導のねらいや有効であった手立て、配慮を要する児童の学びの特徴について、具体例を交えて丁寧に引き継いでいく。	
⑦組織運営・業務改善	業務の効率化	効率的に業務にあたるために、部会や主任会の計画的な設定や放課後時間を確保する。	教頭	昨年度より日課の工夫による放課後時間の確保に努めてきた。学校研究や学級事務に関わる業務を行うことができた。今年度も教務と連携し日課の工夫を行い、見直しをもった業務の遂行に努める。	【成果指標】 月予定や年間予定を見直し、日課の工夫による放課後時間の確保等を生かして効率的に業務を遂行することができた。	月予定や年間予定を見直し、日課の工夫による放課後時間の確保等を生かして効率的に業務を遂行することができた児童が10人中 A 8人以上 B 7人 C 5~6人 D 4人以下	1・2学期末に教職員を対象にアンケート調査	A	A	職員会議における議案の内容によって、必要性が低いと判断した部会や主任会をなくしたことで、業務の軽減を図った。また、見直しを持った業務遂行の手立てとして金明ポータルを活用したことにより、情報共有が円滑になり、職員の業務負担軽減につながった。あわせて、紙媒体の使用を減らすことで、印刷に要する時間の軽減にも効果があった。来年度も業務の効率化を念頭にいた組織運営を意識していく。
⑧研修	若手教員の育成	日常的OJTを意識して、若手教員相互による学び合いを行う。	教頭	若手教員が4名おり、うちⅢ期の教員が3名である。若手研修のリーダーを中心に日常的なOJTを進め、相互の学び合いや指導力の向上を図る。全教職員で育成のための指導・助言にあたる。	【成果指標】 普段から若手教員相互による学び合いや全教職員の指導・助言をすることができた。	日常的なOJTを意識して相互に学び合うことができた児童が10人中 A 9人以上 B 8人 C 6~7人 D 5人以下	1・2学期末に教職員を対象にアンケート調査	A	A	職員室での教職員の会話は、クラスの出来事や授業づくりの迷いや悩みなどが多く、自分の意見や考えを互いに話し合える安心感がある。風通しの良い職場環境が、教職員の学び合う風土づくりの基盤であるので、来年度も金明小職員室の文化としてつなげていきたい。
⑨保護者、地域との連携	開かれた学校づくり	学校と地域の要望を相互につなぐためにCSとの連携を図る。	教頭	昨年度は授業サポートとしてまちの先生を依頼してきたが、教科や学年の広がりをもたせるために計画的にサポート依頼を行うと、開かれた学校づくりにおいてより効果的である。	【努力指標】 計画的に、必要に応じたまちの先生の依頼に努めている。	必要に応じたまちの先生の依頼に努めている教職員が9人中 A 8人以上 B 7人 C 5~6人 D 4人以下	1・2学期末に教職員を対象にアンケート調査	A	C	各教科の単元構想を計画的に行うことで、まちの先生の依頼につながる。そのため授業者の年間を見通した計画が必要である。今年度の実績を来年につなげるとともに、年度初めの年間計画を立てていきたい。また、来年度は年間計画を指導計画に繰り見える化を図るとともに、CS担当者が授業者に事前の声かけをして意識を高めていく。
⑩教育環境整備	児童の意欲を高める環境デザイン	児童が学びの主体として成長できる環境づくりを進め、自己選択を尊重し、意欲的な学びを支える場作りを行う。	教務主任 研究主任	昨年度は、環境設定に努めた肯定的に回答した教師が100%であったが、すべての児童に効果的に機能していたとは言えない。児童一人ひとりがより主体的に学べるよう、教科のねらいや実態に即した環境デザインを工夫する。安心して思考を表現できる人間関係や空間、見通しをもたせた教材提示、多様な学び方を選べる柔軟な学習環境を通して、自ら学びを深める力を引き出す場を創出する。	【努力指標】 自律した学びを進めることができる環境づくりに努めている。	環境づくりに努めた教職員(机等の配置やヒントカード等)が9人中 A 8人以上 B 6~7人 C 4~5人 D 3人以下	1・2学期末に教職員を対象にアンケート調査	B	A	単元構想部会では、他教科書との比較や学習指導要領との関連を踏まえた教材研究を行い、指導の要点を明確にし、環境設定に生かす取組が一定程度見られた。一方で、こうした実践を常に授業に反映できているわけではなく、継続的な取組には課題が残る。また、児童理解を生かした授業づくりの重要性が改めて確認された。あらかじめ用意した支援が授業中にどのように機能しているかを児童の学びの姿から見取り、必要に応じて次の支援へとつなげていくことも、学びの環境を整える重要な視点にしていなければならない。

学校関係者評価	<p>9/3 CSにて 【質問】メディアのルールにはどんなものがあるのかを学校も把握してもよいのではないかという質問があった。メディアについては家庭におけるルール作りとその実行が大切であり、学校との連携のためにも把握は必要である。いじめについては毎月の学校生活アンケートによる調査のほか、普段の児童観察や児童理解を行っており、未然予防や初期対応に心がけている。</p> <p>【意見】自学の内容を担当者がアドバイスすることがあってもよい。保護者もほかの児童が行っている自学の内容を見る日を設定してほしいなどがあった。来年度の自学取組の参考にする。</p> <p>2/9 CSにて 【意見】学校が楽しいと思える児童が多いのは大変うれしいことである。児童主体の自治的な活動の促進において、教職員がゆずれないこととのバランスを大切にしたい。地域と学校、家庭の連携について、今後も学校の要望に応えていきたい。</p>
---------	--